帰京

要旨

帰京してみると自宅は荒廃しており、留守を預かっていた隣人を薄情に思う。枯れた松の中に小松が生えているのを見て、亡くなった女子への思いを新たにし、和歌を詠みあげる。思いは尽きず、この日記を破り捨てようと思う。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P七九・6〈志はせむとす。〉	帰京して家に着いて様子を見ると、屋敷は荒廃していた。留守を預かっていた隣人の心の荒れ具合も分かった。それでもお礼はしようと思う。
第二	P七九・7〈さて〉～終わり	屋敷の池のほとりの松も半ばは枯れている。新しく生えた小松が交じっているのを見て、女の子を亡くした悲しみを新たにし、歌を詠むが、思いは尽きない。この日記を破り捨てようと思う。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①京（きやう）　に　入（い）りたち　て　うれし。　②家（いへ）　に　至（いた）り　て、　門（かど）　に　入（い）る　に、　月（つき）　明（あ）かけれ　ば、　いと　よく　ありさま　見（み）ゆ。

格助・帰着　タ四・用　接助・理由　形シク・終　格助・帰着　ラ四・用　接助・単接　格助・帰着　ラ四・体　接助・単接　形ク・已　接助・順理　副　形ク・用　ヤ下二・終

①京に入っていったのでうれしい。②家に着いて、門に入ると、月が明るいので、たいそうよく（屋敷の）様子が見える。③聞いていたのにもまして、

③聞き（カ四・用）　し（過・体）　より（格助・比基）　も（係助・強意）　まし（サ四・用）　て、（接助・単接）　言ふかひなく（形ク・用）　ぞ（係助・強意（係））
こぼれ破れ（ラ下二・用）　たる。（存・体（結））　④家（格助・対象）　に　預け（カ下二・用）　たり（存・用）　つる（完・体）　人（格助・体修）　の　心（係助・同類）　も、
荒れ（ラ下二・用）　たる（存・体）　なり（断・用）　けり。（詠・終）　⑤中垣（係助・強意（係））　こそ　あれ、（ラ変・已・結）　一つ家（格助・体修）　の
やうなれ（比・已）　ば、（接助・順理）　物（係助・同類）　も　絶え（ヤ下二・未）　ず（打・用）　得（ア下二・未）　させ（使・用）　たり（存・終）。　⑦今宵（連）、かかる　こと
に（格助・時間）　物（係助・同類）　も　絶え（ヤ下二・未）　ず　得（ア下二・未）　させ（使・用）　たり（存・終）。　⑥さるは、便りごと
と、（格助・引用）　声高に（形動ナリ・用）　もの（係助・強意）　も　言は（ハ四・未）　せ（使・未）　ず。（打・終）　⑧いと（副）　は（係助・強意）　つらく
見ゆれ（ヤ下二・已）　ど、（接助・逆確）　志（係助・区別）　は　せ（サ変・未）　む（意・終）　と（格助・引用）　す。（サ変・終）

⑨さて、（接）　池（カ四・用（イ音））　めい（接助・単接）　て　くぼまり（ラ四・用）、水（カ四・已）　漬け（存・体）　る　所（ラ変・終）　あり。　⑩ほ
とり（格助・場所）　に　松（係助・同類）　も　あり（ラ変・用）　き。（過・終）　⑪五年（格助・体修）　六年　の　うち（格助・時間）　に、千年
や（係助・疑問（係））　過ぎ（ガ上二・用）　に（完・用）　けむ、（過推・体（結））　かたへ　は（係助・区別）　なく（形ク・用）　なり（ラ四・用）　に（完・用）　けり。（過・終）
⑫今（副）　生ひ（ハ上二・用）　たる（完・体）　ぞ（係助・強意（係））　交じれ（ラ四・已）　る。（存・体（結））　⑬おほかた（格助・主格）　の、　みな（副）　荒れ（ラ下二・用）
に（完・用）　たれ（存・已）　ば、（接助・順理）　「あはれ。」（感）　と　ぞ（係助・強意（係））　人々（格助・引用）　言ふ。（ハ四・体（結））

お話にならないくらい壊れいたんでいる。④家に託しておいた（留守番の）人の心も、（家と同様に）すさんでいるのであったよ。⑤（隣家とは）隔ての垣根はあるが、一つの屋敷のようであるので、（隣家から）望んで預かったのである。⑥そうではあるが、ついでがあるたびに贈り物も絶えず受け取らせていた。⑦今夜は、このようなまだ（屋敷がひどく荒れている）と、（皆に）大声で言わせたりしない。⑧実に（隣家が）薄情だと思われるが、（留守を預かってくれた）お礼はしようと思う。

⑨ところで、池のようにくぼんで、水がたまっている所がある。⑩そばに松もあった。⑪（留守にしていた）五、六年のうちに、千年が過ぎてしまったのであろうか、一部分はなくなってしまっていた。⑫新たに生えたのが交じっている。⑬だいたいが、すっかり荒れてしまっているので、「ああ（ひどい）。」と人々は言う。⑭思い出さないこととてなく、恋しく思われる中で、この家で生まれた女の子が、一緒に帰

⑭思ひ出でぬ　こと　なく、　思ひ恋しき　が　うち　に、　この
ダ下二・未　打・体　形ク・用　形シク・体　格助・体修　格助・場所　代　格助・体修

家　にて　生まれ　し　女子　の、　もろともに　帰らね　ば、　いかが
格助・場所　ラ下二・用　過・体　格助・主格　副　ラ四・未　打・已　接助・順理　副

は　悲しき。⑮船人　も　みな、子　たかり　て　ののしる。⑯かかる
係助・強意　形シク・体　係助・同類　副　ラ四・用　接助・単接　ラ四・終　連

うち　に、　なほ　悲しき　に　堪へ　ず　して、　ひそかに　心　知れ
格助・時間　副　形シク・体　格助・対象　八下二・未　打・用　接助・単接　形動ナリ・用　ラ四・已

る　人　と　言へ　り　ける　歌、
存・体　格助・相手　八四・已　完・用　過・体

生まれ　し　も　帰らぬ　ものを　わが　宿　に　小松
ラ下二・用　過・体　係助・同類　ラ四・未　打・体　接助・逆確　代　格助・体修　格助・場所

の　ある　を　見る　が　悲しさ
格助・主格　ラ変・体　格助・対象　マ上一・体　格助・体修

と　ぞ　言へ　る。⑰なほ　飽か　ず　や　あら　む、
格助・引用　係助・強意（係）　八四・已　完・体（結）　副　カ四・未　打・用　係助・疑問（係）　補動・ラ変・未　推・体（結）

また、かく　なむ。
副　副　係助・強意

⑱見　し　人　の　松　の　千年　に　見　ましかば
マ上一・用　過・体　格助・主格　格助・比喩　格助・変化　マ上一・未　反仮・未　接助・順仮

遠く　悲しき　別れ　せ　まし　や
形ク・用　形シク・体　サ変・未　反仮・終　係助・反語

忘れがたく、口惜しき　こと　多かれ　ど、　え　尽くさ　ず。⑲とまれ
形ク・用　形シク・体　形ク・已　接助・逆確　副　サ四・未　打・終　副

らないので、どんなに悲しいことか。⑮同じ船で帰ってきた人も皆、子供が寄ってたかって大騒ぎしている。⑯こうした中で、やはり悲しい思いに耐えきれずに、こっそりと気持ちを分かってくれている人と詠んだ歌、

生まれしも…（《この家で》生まれた女の子も帰ってこないのに、わが家に《新たに生えた》小松があるのを見るのは悲しいことよ。）

と言った。⑰それでも飽き足りないのであろうか、さらに、このように（詠む）。

⑱見し人の…（かつて見た人《亡くなった女の子》が松のように千年の寿命をもつものと見ることができたら、遠く《土佐の国で》悲しい別れをしたであろうか。いや、しなかっただろうに。）

忘れがたく、残念なことが多いけれど、書き尽くすことはできない。⑲ともかく、早く（こんな日記は）破ってしまおう。

かうまれ、疾(と)く破(や)りてむ。
副 | 形ク・用 | ラ四・用 | 強・未 | 意・終

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶ 帰京した日付を確認し、土佐を出発して二か月弱経過していることに注意する。

❶ P七四の地図を使って確かめさせる。

展開

学習活動のポイント

❶「帰京」を音読する。思判表(1)ア

❷ 重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウ
→「言葉と表現」1

❸ 現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技(1)エ 思判表B(1)アイ
→「学習のポイント」1

❹ 二首の和歌を鑑賞する。思判表B(1)エ
→「学習のポイント」2

❶全文を通して音読する。「うれし」「つらし」「恋し」「悲し」などの語に注意しながら一気に通読することで、作者の心情の動きを大づかみにすることができる。

【評価】 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷接続助詞「ば」の用法を確認する。「こそ…已然形」の逆接用法は確実に理解させたい。係り結びの挿入句を指摘させ、機能を理解させる。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸「今生ひたる」（七九・8）「かくなむ」（同・14）などの下に適語を補って現代語訳させる。段落ごとに、作者の目に映るものとそれに触発された心情とを整理させ、作者の心情の変化を理解させる。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。
・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中に指名し、部分の現代語訳により、確認する。
・作者の心情の変化について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、段落ごとに整理させることにより、確認する。

❹和歌に用いられる動植物などには固定的なイメージを帯びているものも多く、ここでは松の持つイメージを、小松引きなどの習俗も紹介しながら理解させ、鑑賞に役立たせる。

【評価】 二首の和歌に込められた心情について、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、意見交換をさせ、発表により、確認する。

《板書例》 作者の心情の変化

心情の変化	心情が引き起こされる元になった事実
うれし	京に入りたちて
←	
つらく	言ふかひなくぞこぼれ破れたる
←	
悲しき	この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば

まとめと発展

学習活動のポイント

❶ 末尾における作者の心情を考え、その箇所と冒頭を読み比べる。 知技(1)ア・(2)エオ 主態 →**「言語活動」1**

❶第二段落は作品全体の末尾であり、冒頭の女性仮託と呼応していることに注意させたうえで考えさせる。「破ってしまおう」と言いながら実際には残っていることの意味を考えさせる。仮名日記文学を作者自身どのように考えていたか。末尾の一文について話し合わせる。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。
・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。
・歴史的な文体の変化について、日記文学が単なる事実の記録にとどまらず、作者の思想や人々の心情を掘り下げることのできる文学形態であることに理解を深めているか、確認する。
・進んで日記文学の特徴や成立の背景や、和歌などの表現の工夫を味わい、学習課題に沿って、最後の一文と「土佐日記」の冒頭部との対応について話し合おうとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

●七九ページ

問　**「聞きしより」（3行目）とあるが、誰が、どこで、何について「聞きし」なのか。**

答　作者（貫之）が、任地（土佐の国）で、都の我が家の様子について。

問　**「言ふかひなく」（3行目）について、これは、筆者のどのような気持ちを述べたものか。**

問　**2　ここでの意味を次の中から選べ。**
(ア)取るに足りない　(イ)何とも言いようがない　(ウ)いやしい　(エ)つまらない　(オ)ふがいない

答　1　口に出して言いようもないほど驚きあきれる気持ち。2 (イ)

問　**「家に預けたりつる人の心」（3行目）という言い方は、「家を預けたりつる人の心」という言い方とどう違うか。**

答　事実を普通に表現した後者に対し、前者は「家」が主で「人」が従であるかのような言いなしになっており、皮肉な表現と言える。

問　**「人の心も、荒れたるなりけり。」（4行目）には、どのような心情が表れているか。**

答　隣人の無責任ぶりを改めて感じた人間不信の気持ち。

語句の研究

●七九ページ

2京に入りたちて　一行は承平五（九三五）年二月十六日に帰京した。ここでは「入り込む、深く入る」の意。「入って立つ」という意ではない。「秋のけはひ入り立つままに…」（「紫式部日記」）なども、秋の気配が立ったことを言うのではなく、深まってゆくことを言う。京の市中に入り、家に近づいていくうれしさであろう。

2家　前土佐守の家。貫之の家は現在の京都御苑内、京都御所の東南の仙洞御所の辺りにあったと伝える（「無名抄」「拾芥抄」）。

2月明かければ　二月十六日、望月（満月）に近い十六夜の月の頃。本文の直前に「夜更けて来れば」とあり、月もかなり高く上っていたと考えられる。

3言ふかひなく　「言ふかひなし」は言ってもどうにもならないさま。

3こぼれ破れたる　「こぼれ」は「毀れ」で、「壊れる」の意。

3家に預けたりつる人の心　難解な箇所で、「を」と代替できる「に」と見て「家を預けたりつる」と同じとする説（小西甚一）、「に」に累加・添加の作用を認めて「家だけでなくそのうえに、預けておいた人の心も」とする説（萩谷朴）など諸説ある。ここでは、家の荒れ具合から預かっていた隣人の誠意の有無が分かるので、人の心を家に託したようなものだという皮肉な表現であるとする説（鈴木知太郎）に従う。これでは、人に家を預けたのか、家に人を預けたのか分かったものではない、と隣人の無責任さに対する不満を皮肉に表現したというのである。

4なりけり　断定の助動詞「なり」の連用形＋詠嘆の助動詞「けり」の終止形。荒廃した家を見た今、隣人の心のすさみように初めて気づいた、という気持ち。

4中垣こそあれ　「中垣」は隣家との隔ての垣根。「こそ…已然形」で文が終止せずに先に続いていく場合、逆接のニュアンスで解釈すべきことが多く、ここも「中垣はあるけれども」の意。

5望みて預かれるなり　主語は隣人。自分から管理を申し出ておいてこの荒れようは何だ、という作者の不満が表現されている。

5さるは　ラ変動詞「さり」の連体形に係助詞「は」が付いた形に由来するといわれ、

問「中垣こそあれ」（4行目）について、
①「こそあれ」を文法的に説明せよ。
②この部分を現代語訳せよ。

答 ①「こそ」は強意の係助詞。「あれ」はラ変動詞「あり」の已然形で結びだが、ここで切れないで下へ逆接の関係で続いている形。
②（隣家とは）隔ての垣根はあるけれども。

問「望みて預かれるなり。」（5行目）について、誰がそうしたのか。

答 隣家の人

問「望みて預かれるなり。」（5行目）と記す作者の心情を答えよ。

答 自分から管理を申し出ておいて屋敷を荒らしてしまった隣人への怒り。

問「さるは」（5行目）とは、ここではどのような意味か。

答「そうではあるが」という逆接の意。

問「便り」（5行目）とは、ここではどのような意味か。

答 ついで。機会。

問「物」（5行目）とは、具体的には何を指しているか。

答 贈り物（心づけの品物）

問◉「かかること」（5行目）とは、どのようなことを指しているか。

答 土佐守在任中、京の家を留守にしているうちに、家がどうしようもなく壊れいたんで屋敷の内の具体的な描写に移っていく。

7池めいて「池めい」は「池」に「それらしくなる（見える）」の意を添える接尾語「めく」が付いてできた四段動詞「池めく」の連用形のイ音便形。ここは、かつて池であったものが池めいた窪みになり、じくじくとした水たまりになっていたと皮肉を込めて言ったもの。次の「松もあったのに、一部はなくなっていた」と対応している。
一説に、屋敷内の池を謙遜して言ったとする。

7水漬ける所　水がたまっている所。

7松もありき「き」は直接体験の過去の助動詞。任国に赴任する以前の邸内の様子。

8千年や過ぎにけむ　下の「かたへはなくなりにけり。」の理由を推測する疑問の挿入句。常緑で千年の長寿を誇ると考えられた松が枯れたのは千年が過ぎ去ったからかという疑問で、管理を怠った隣人への皮肉。

8かたへ　一部分。

8今「今」はニュアンスの多様な語で、ここは旧に対する新の意。

9あはれ　喜怒哀楽によって深く感動したときに発する語。屋敷内全般が荒廃しているのでいちいち取り上げることができず「あ前に述べられたことを受けてその別の側面に着目する表現。前後の事柄が矛盾する場合には逆接的に「そうではあるが」と解し、矛盾しない場合には「というのは、そのうえ」などと解釈する。ここは逆接で、こちらが頼んだのではなく、隣人から望んで預かったのではあるが、という気持ち。

5かかることと、声高にものも言はせず
「かかる」は「かくある」に同じ。家が荒廃していることを指す。従者や家人の憤慨の言葉を制止する前土佐守は、事を荒立てることを好まない人物であることが分かる。
「言はせず」を「隣人に弁明させない」の意に採る説もあり、それなら「かかること」は管理が行き届かなかった事情を指し、本文中には指示内容が存在しないことになるので、採らない。

6いとはつらく「は」は強調の係助詞。形容詞「つらし」はここでは「薄情だ」の意。

6志　本来はある方向へ向かう気持ちのことだが、その気持ちを表すための物品を贈ること及びその物品を指すようにもなった。ここはそれで「お礼」の意と採る。

7さて　副詞「さ」に接続助詞「て」が付いてできた語で、ここでは話題の転換を表し、

いたこと。

補 家人が久しぶりに家を見て、あまりの荒れ様に憤慨して発した言葉であることに注意する。

問 **「声高にものも言はせず。」「いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。」（6行目）から作者のどのような人柄がうかがわれるか。**

答 たとえ不誠実な相手であっても、事を荒立てることを好まず、礼節は尽くそうとする人柄。

問 ◉**「いとはつらく見ゆれど」（6行目）とあるが、誰が、誰のことを、どのように思っているのか。**

答 作者（貫之）が、自分の家を預かってくれた隣の人のことを、実に薄情だと思っている。

問 **「志はせむとす。」（6行目）について、[易]1「志」とは、具体的にどうすることか。[中]2そう考えたのは、なぜか。**

答 1感謝の気持ちを表すお礼の品を贈ること。2形だけでも留守の家を預かることを申し出てくれた好意に対してはお礼をするのが良識であると考えたから。

問 **「ほとりに松もありき。」（7行目）とは、いつのことを述べている文か。**

補 答 土佐の国に赴任する以前。非過去を基本とする文章の中で過去の助動

あ」と声をあげるしかなかったのである。

10この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば 任国への赴任時にはなく帰宅後見出された新生の松との対比で、赴任時には同行したのに任地で亡くなった女の子のことが思い起こされる。その気持ちが一首目の和歌に表現される。

11いかがは悲しき 「いかが」は疑問の副詞。ここでは程度を問う「どんなに」の意。「いかにか」の変化という。疑問の副詞を受ける述語は連体形で結ぶ準係り結びの法則により、「悲しき」となっている。

11船人 作者と同じ船で帰京した人々。

11たかりて 群がって。

12心知れる人と言へりける歌 「心知れる人」は前土佐守（作者）の妻を指すか。子供に囲まれて騒いでいる同行者たちから切り離されたように感じ、それを共有できる人である。「言へりける」の主語は、無敬語であることから作者に仮託された女性とも思われるが、後に「なほ飽かずやあらむ」とその心中を推測しているので仮託された女性から見た作者だと考えられる。このようなあいまいさは、日記の作者を第三者の女性に仮託したために生じている。

13生まれしも… 「し」は過去の助動詞「き」の連体形の準体法で、下に「子」などを補って解釈する。「ものを」は逆接の接続助詞。「見るが悲しさ」は「体言（連体形）＋が＋形容詞語幹＋さ」で、「…は～なことだ」の意の詠嘆表現。

14なほ飽かずやあらむ 下の「また、かくなむ」の理由を推測する係り結びの疑問の挿入句。

14かくなむ 下に「詠める」「言へる」などを補って解釈する。前歌の詠み手がさらに詠んだと考えるのが通説だが、「心知れる人」が詠んだとする説もある。

●八〇ページ

1見し人の… 「見し人」は「かつて見た人」の意で、ここは亡くなった女の子を指す。「見ましかば」の主語は詠み手で、「松のように千年の寿命をもつものと（私が）見ることができたら」の意。反実仮想なので、実際はそうすることはできず死んでしまったといういっそうの悲しみを帯びた歌になっている。「遠く」は「遠く土佐で」の意と「永遠に」の意とを掛ける。「ましや」の「や」は反語で、「…しただろうか、いやしなかっただろうに」の意。

詞「き」が用いられていることに注意。

問 **「千年や過ぎにけむ」（8行目）は、一文中でどのような働きをしているか。また、このように言う作者の気持ちを答えよ。**

答 「五年六年のうちに、かたへはなくなりにけり。」という事実の理由を作者が推測する働き。係り結びの疑問の挿入用法。松を枯らしてしまった隣人の管理のずさんさを皮肉る気持ち。

問 **「今生ひたるぞ交じれる。」（8行目）を現代語訳せよ。**

答 新たに生えた松が交じっている。

補 「たる」は完了の助動詞の連体形の準体法。下に「松」を補って現代語訳する。

問 **「おほかたの」（9行目）の「の」を文法的に説明せよ。**

答 主格を表す格助詞

問 **「あはれ。」（9行目）と言う人々の状況を具体的に説明せよ。**

答 荒廃が屋敷の全般に及んでいるので、いちいち指摘できずにただ「ああ」と声をあげるしかない状況。

問 **「生まれしも」（13行目）を現代語訳せよ。**

答 生まれた女の子も。

補 この「しも」は過去の助動詞「き」の連体形＋強意の係助詞「も」。「し」は準体法。

問 **「わが宿に小松のあるを見る」（13行目）の「が」「悲し」い理由を説明せよ。**

答 土佐に行く前にはなかった小松が生えているのを見て、「小」から「子」が連想され、逆に、この家で生まれた女の子が土佐で死んで帰ってこなかったことへの悲しみが新たになったから。

問 **「ひそかに心知れる人と言へりける」（12行目）とあるが、「ひそかに」言うのはなぜか、理由を説明せよ。**

答 帰国した人々が、連れて帰った子供たちや、都で帰りを待っていた子供たちと、再会を喜んでいるさまに、愛児を亡くした孤独な思いをいっそう募らせるとともに、なおかつ人々の久し振りの再会の喜びに水を差さないように遠慮もしているから。

問 **「生まれしも」（13行目）の歌と、「見し人の」（八〇・1行目）の歌に共通する「悲しさ」はどのようなものか、説明せよ。**

答 この家で生まれた女の子が任地（土佐の国）で死に、一緒に帰ってこない悲しみ。

問 **「なほ飽かずやあらむ」（14行目）を現代語訳せよ。**

答 それでも飽き足りないのであろうか。

問 **「なほ飽かずやあらむ」（14行目）は誰の立場からの、どのような言葉か。**

答 作者に仮託された女性の立場からの、「ある人」が重ねて歌を詠む理由を推測する言

---

2 口惜しき 他人や事態の成り行きが期待通りではなく、がっかりする気持ちを表す。

2 多かれど 普通の形容詞ではカリ活用は助動詞の接続のため以外はほとんど用いられないが、「多し」だけは特殊な活用形を持ち、終止形「多かり」、已然形「多かれ」がしばしば用いられた。

2 え尽くさず 「え」は打消と呼応して不可能を表す副詞。「書き尽くすことができない」。ここでの文の流れとしては、忘れがたく、残念なことが多いが、とても書き尽くすことができないということ。一方、作品冒頭の「いささかにものに書きつく」と対応していると見ると、記録として少しばかり書きつけるつもりだったのに、さまざまなことを書き連ねてしまって、それでも書き尽くすことができないということ。

2 とまれかうまれ 「ともあれかくもあれ」の「もあ」がつづまり、「く」がウ音便化したもの。「あれ」は命令形の放任法。「あってもこうでもかまわぬ」という気持ち。

2 疾く破りてむ 「この日記を早く破ってしまおう」。「て」は強意（確述）の助動詞「つ」の未然形。作品冒頭の「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてする

葉。係り結びの疑問の挿入用法。

問 **「かくなむ」（14行目）の「なむ」の結びはどうなっているか。**

答 「詠める」などの言葉が省略されている。

●八〇ページ

問 **「見し人」（1行目）とは、誰のことを指すか。**

答 作者の、土佐で亡くなった娘のこと。

補 直訳だと「見た人」となるが、これは土佐に赴く以前に京で「見た人」ということで、作者の娘のことになる。その娘は土佐で亡くなっているので、過去形に意味があることになる。

問 **「忘れがたく、口惜しきこと」（2行目）の中で、いちばん痛切な事柄は何か。**

答 この家で生まれた子が任地で亡くなり、一緒に帰ってこなかったこと。

問 **「破りてむ。」（2〜3行目）の「てむ」を文法的に説明せよ。**

答 強意（確述）の助動詞「つ」未然形＋意志の助動詞「む」終止形。

補 助動詞「つ」「ぬ」は推量の助動詞「む」「べし」などが下に続く場合、強意（確述）の意となり、「きっと…」「たしかに」と訳す。

問 **「破りてむ。」（2〜3行目）とあるが、作者は何を破ろうというのか。また、そのように言う気持ちを答えよ。**

答 この日記。残しておく価値のないものという謙遜の気持ち。

なり」に対応した偽装の表現。作者の「読むべき内容のものでない」とするポーズの表れから破り捨てようとした。それは逆に言えば、男性漢文日記の公的性格や記録性を脱して人生の真実を描き出す仮名日記文学が誕生したと宣言していることにもなる。

鑑賞

強く希求しつづけた京へ、承平五（九三五）年二月十六日、ついに一行は帰ってきた。喜びはひとしおである。ところが、落ち着くべき我が家は、月明かりの中に無残に荒廃した姿をさらしていた。留守を預かっていた隣人の管理がずさんだったのである。帰京の喜びも束の間、世人の薄情さを思い知らされることになった。

荒廃した屋敷を見回す一行には、「あはれ。」という嗟嘆の声以外、言葉も出てこない。そのような中、作者の目に新たに生えた小松が入ってくる。それは対比的に土佐で亡くなった女の子を思い起こさせ、子を亡くした親としての悲嘆も新たに募る。

居宅の荒廃、隣人の不人情、亡児への悲傷はいずれも作者を深い喪失感に誘うものであるが、この日記を記したとき、貫之を取り囲む情勢は極めて厳しいものであった。彼の土佐在任中に、醍醐天皇、宇多上皇、藤原定方（ふじわらのさだかた）、同兼輔といった庇護者たちが相次いで世を去っており、帰京した彼は、有力者の庇護もなく、土佐守の次の官も得られず、多くのものを失った状態にあったのである。「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。」という末尾の文言は、そのような作者の心情の表れであり、荒涼たる屋敷の風景は、彼の心情の形であったと見ることも可能であろう。

それにしても、「疾く破りてむ。」とは言うものの、この日記は破棄されることなくむしろ流布していったのであり、真意とは異なる偽装の表現である。多くの虚構を交えながらつづられてきたこの作品の大尾として誠にふさわしいと言えるだろう。

コラム

「作者」の女児は実在したのだろうか？

『土佐日記』の面白さを生徒に伝えるのは、なかなかに難しい。助動詞「なり」の解説を交えながら（→言葉の学習1）、「男もすなる…」という「門出」の有名な冒頭部分について文法的な説明をしたり、作者が女性に扮する形で書かれた作品の虚構性について解説したり…。さまざまなアプローチが考えられるが、どうも一方的な知識の伝達に終始してしまいがちである。

そこで、『土佐日記』の虚構性について生徒に実感してもらうために、「作者の『女子』は本当に存在したのか？」という問いかけを想定してみたい。「帰京」においてとりわけ印象的であるのは、任地で亡くしたという女児を追慕する叙述である。帰京する喜びと裏腹に、不在の女児を追懐することで表面化する喪失感が、痛々しいまでに読者の心を打つ。

一方で、作者・紀貫之が任国の土佐国から帰京したのは承平五（九三五）年、六十歳を超える年齢であったと考えられる。先入観を持ちすぎてはならないが、幼い女児がいたというのは現実的にはどうも考えにくい。もしそうならば、任地で女児を亡くしたという叙述そのものが、作者による虚構の産物だということになる。

「子どもの死を安易に扱うなど不謹慎だ」という印象を、生徒達は抱くかもしれない。しかし、裏を返せば、作者の虚構性に対する拘りがそこまで切実なものであった、ともいえよう。作品全体に強烈な哀感を漂わせて読者を引きつけるための手段として、虚構としての我が子の死を描くという「不謹慎」さを、作者は引き受けたのである。

冒頭の女性仮託の方法だけではなく、『土佐日記』にはこうした虚構の世界が随所にみられることを確認しておきたい。

（小林　俊洋）